

2018年7月14日

全体討論

パネラー：關尾 史郎
荒川 正晴
成 正鏞
司会：高久 健二

高久：時間となりましたので、討論を始めさせていただきたいと思います。

今回のテーマは「古代東ユーラシアの国際関係と人流」であり、幅広い地域を対象としています。これらをすべてまとめるのはかなり難しいのですが、それぞれのご発表の関連性について探っていきたいと思います。

まずは、ご発表いただきました3名の先生方から追加のコメントをお願いしたいと思います。まずは關尾先生からお願いしたいと思います。また、可能な範囲で結構ですので、会場からの質問につきましても、お答えいただければと思います。

關尾：特に付け加えることはないのですが、終わりから3つ目のコマで、37の番号が付いている、敦煌から出てきた鎮墓瓶の写真があるかと思いますが、先ほどスクリーンでお見せしたものは少しプロポーションが違っていたような感じでした。37をプリントアウトしたこの形が本来の形ですので、補足をさせていただきます。

この鎮墓瓶について、最後でしたからゆっくりと説明することができませんでしたが、1世紀から2世紀にかけて長安や洛陽の近郊でこういう鎮墓瓶を墓の中に入れるという習慣が始まりました。当初、高さが20センチ以上もあるような大きな鎮墓瓶が作られておりました。台東区の鶯谷駅から徒歩5分ぐらいにある書道博物館に、後漢時代の大きな鎮墓瓶の実物が展示されていますので、ご覧になられるとよろしいかと思います。それと比べますと、敦煌から出てきたものは、先ほど申しましたように、高さが10センチに満たない。それも形も美しいとはいえませんでした。ただ、敦煌から出てきた鎮墓瓶の数は、簡単に作ることができるということもあるのだと思いますが、未整理、未発表のものもたくさんありますのではっきりした数字は把握できていません。現時点で、敦煌から出土した鎮墓瓶の数はトータルでおそらく400近くあります。これは270年代から420年代までの150年ぐらいの間に作られたものばかりです。中国広しといえども、これだけの鎮墓瓶が出土した例はございません。なぜ、敦煌ではそんなに突然、爆発的に普及したのかというのが非常に大きな謎であるわけです。ただ、そういう事実があるということだけお伝えしたいと思います。

いくつか質問をいただきましたが、クチャのお墓に何層にもわたって何十体もの遺体が埋葬されていたということですが、これはまったくわかりません。死亡した時期がいつ頃なのか、同じ

なのかということについても、そもそもこのお墓がいつ造られたのかということでは、先ほどもいいましたように、魏晋時代から五胡十六国時代というのは発掘担当者の意見ですから現在はそれに従うしかありませんが、中国の学者の中には9世紀、10世紀ぐらいに造られたという人もいますので、何百年も時間差があります。そういう見解を出している中国の考古学者もいるようですので、お墓がいつ造られたのかということ自体からしてまだ統一見解が定まっていない状況です。これは私の推測ですが、同時に死亡したということはまず考えられないので、亡くなった時期に時間差というのはあって、世代的に少しずれている可能性は十分に考えられるだろうと思います。これは日本の弥生時代の埋葬でも同じようなことがいえるようです。

五胡十六国時代の河西地域というのは漢族が中心に住んでいました。もちろん、非漢族もいましたが、漢族の社会であったという前提でお話をいたしました。また、内乱によってそこに避難してきたということも申し上げたわけですが、それに伴って、もともと河西地域に住んでいた人がみんななくなってしまったわけではなく、そういった移動に触発された人々がさらに西のほうの高昌に移っていったということです。それ以前も高昌には漢族が住んでいましたが、名目的には郡県制の枠外にあり、いわゆる前線基地だったわけですが、327年に高昌郡が設けられて内地と同じような扱い方になったため、名実ともに漢族の生活空間になったという意味で言葉を使わせていただきました。そこを補足させていただきたいと思います。

高久：ありがとうございました。

磚室墓のような横穴式の墓制では、追葬の際にその前に埋葬された骨を奥に整理するような行為がおこなわれますので、これは明らかに追葬と考えられます。かなりの長期間にわたって追葬が繰り返された結果とみるのが妥当であり、日本の横穴墓などとも共通する部分があると思います。続きまして、荒川先生に追加のコメントをお願いいたします。

荒川：説明不足でしたので、補足しなければいけないところがたくさんあるかと思います。まず、最初に図像が不鮮明で本当に香木を表しているのかどうかかわからないかと思いましたので、その点についてご説明をしていきたいと思います。

いま映し出されているのが、最近公表された中国国家博物館所蔵の北朝期「石堂（石槨）」に描かれているレリーフ（線刻図）で、祇教の儀式に参列するソグド商人の一行が描写されていると考えられているものです。彼らの前に並べられているものが、香木の白檀かなというふうに思います。その理由ですが、拡大していただくとわかるのですが、ここに木の割れ目のようなものが描かれています。これについては、単純に絹織物を巻いたものだという説明が一般的に付けられているようなのですが、どう見ても、これは棒状の木に割れ目が入っているという感じにしか見えません。なので、おそらくこれは単純に絹織物を巻物にして並べているのではなく、香木の部類が並べてあるというようなことだと思います。たぶん、こうした宗教儀礼の場で高額な商品を奉納するのは、よくあることだと思います。

絹織物でも、もちろんそれはそれで価値はありますが、普通の絹であれば奉納するほどのレベルのものではないと思います。もし、これが白檀だと仮定して、しかも法隆寺に伝わるような立

派な白檀で、しかも重量として法隆寺伝来のものは5キロか6キロぐらいありますが、それと同じレベルのものだと仮定するのであれば、その価値というのは8世紀の物価表に照らし合わせて単純に計算してみますと、この5キログラムの白檀の香木1本で遊牧民が育てたと思われる高価格の突厥馬が63疋分ほど買えます。つまり、レリーフに描かれているように25本もあれば、1,560疋ほどの突厥馬が買えるぐらいの価値を持っている商品になり得るということです。もちろん、香木の場合は品質の差はかなりありますので、単純にそういうことがいえるかという問題はあります。しかし目安としてそういった価値あるものが目の前に並べられていると考えるほうが、やはり印象としては強いわけです。これが普通の絹織物であれば、それほどの価値はないというふうに思います。これが1つ補足説明ということになります。

この調子で説明をしていきますと、それだけで時間をとってしまいますので、皆様からいただいたご質問に対してできるだけお答えしていきたいと思えます。

まず、「ソグド語とバクトリア語などの表記文字は何だったのでしょうか」というご質問ですが、ソグド語はソグド文字といわれるものが使われています。これはアラム文字をベースにして作られているものです。バクトリア語はギリシャ文字が表記文字として使われています。

また、「文章は縦書きだったのか、横書きだったのか」という質問ですが、ソグド語の場合はどちらも可能だったというのが答えだと思っています。一般的には東のほうに彼らが移住した後に縦書きになったのではないかという説があり、何かの概説書で読んだ覚えがあるのですが、そういうことはなく、ソグド本国において既に横書きも縦書きもしていたという報告もあるぐらいです。この見解は、ソグド語を言語学的に研究されている吉田 豊さんが既に指摘されていますし、私もそれが正しいと思います。

それから「ソグド人が運んでいた麝香といった香料はわずかな量で価値を持ち、喻えは悪いですが、今の覚せい剤のようなものとのことですが、盗賊に出くわすことも考えられます。王様のようなキャラバン隊となると、武術の達人などに守られながら運んだのでしょうか。またそれなしでは危険な道中だったのでしょうか」との質問です。要するにボディガードがいたのかということですが、遊牧国家の隆盛時には遊牧民たちはソグド人と一緒になって多くの使節団を周辺国やオアシス国家に派遣していますが、そうした移動のときには、おそらくそういったボディガードが同行する可能性があるかと思えます。しかし、一般的な個々の商人はそういったもの抜きで移動したのが基本だと思えます。ただし、移動時においては危険を減じたほうがいいわけですから、みんなで寄り集まって行くことが多かったと思えます。公的な使節というのはそういったボディガードも含めた大集団で移動する機会ですから、おそらくそこに参与していく。つまり公的な使節が出るといったときには、そういった個人的なレベルのソグド商人たちがそこに入って行って、みんなで一緒に移動していくというのが一般的なかたちとなっていたかと思えます。

もし、それを破って、1人で抜け駆けして単独で移動しようとする、即座に山賊や盗賊に狙われることが記録の中でも伝えられています。この辺が答えになるのではないかと思います。

それから、「ソグド人とペルシア人の海上交易における関係の実態はどうであったのか」という質問です。これは私も知りたいところでもあります。さらに「主体はペルシア人でソグド人は便乗するかたちなのか」ということに関しても、講演の中でも指摘したところでもありますが、

これは実証レベルではなかなか難しいところがあります。「主体はペルシア人でソグド人が便乗したのか」については、このペルシア人はムスリム商人としてのペルシア人のことなのですが、彼らはペルシア湾岸から海上交易ルート上に、いくつかの拠点形成していくことになるわけです。おそらくソグド人はそういう拠点に便乗するかたちで一緒に行動していたのではないかと思います。というのが私の推測です。もっともそれはすでに中田美絵さんという方がそれを指摘されておりますので、その人の見解に基づいて紹介いたしました。おそらくそれが実態に近いのかなと考えていますが、そのあたりはよくわからないところがあるというのが本音のところではあります。

それから「ソグドの民は交易のみならず文官、武官にも登用されたと聞かすが、その実態はどうか」という質問です。今回、私は交易という観点からソグド人の話をしています。ただ、現在のソグド人の研究はそういった交易の研究というよりも、どちらかというと政治や軍事、特に軍事面での彼らのプレゼンスの高さに関心が注がれています。それから文化面、これは仏教僧侶としての役割ということも含めての研究になりますが、要するに経済面以外の研究がかなり進んでおりますので、そういった面での研究が着実に深められれば、ソグド人の実態があらためて解明されつつあるのではないかと思います。

それから「仏教伝来にも彼らは関与したのでしょうか」という質問ですが、それに関しては、1つに漢訳仏典というのがあります。すなわちサンスクリット版から漢訳して漢訳經典を作るという作業なのですが、そのときに従事していた者の中になんかソグド人らしき者が入ってきています。おそらくそういったところからも、ソグド人が仏教の伝来にも関与していたのではないかと思います。というのが、一般的な推測としてよく語られるところだと思います。それに関して、冒頭にも見ましたように、クシャーン朝（AD1世紀）時代に彼らが東方に攻撃を開始するのですが、ちょうどそれはクシャーン朝支配下で生まれた大乘仏教が中国にやってくる時期と重なってきています。おそらく仏教伝来に彼らが関与していたのではないかと思います。というのは十分に考えられることだと思います。

それから、「ソグド人は日本に渡来したという話も聞かすが、新羅商人と一緒に来航したのだろうか」という質問ですが、このあたりがなかなか難しいところです。ソグド人が実際に来たのか、例えば鑑真などと一緒に来たソグド人らしき者で安如法がいますが、彼は仏教僧侶ですし、一般のソグド商人が日本にまで普通に来ていたかということ、なかなかそれは難しいところではないかと思えます。一般的に推測することは不可能ではありませんが、それを考えるよりも、実際には来なかったけれども仲介の労を取る商人たち、それは新羅商人もそうですし、先ほどある方から指摘されましたが、渤海系の商人たちも存在するでしょうから、そういった人たちのほうを優先的に考えたほうが、ソグド人が来たか考えるよりもいいとは思っています。

それから、香木として白檀・沈香、さらに麝香という3つを挙げただけで、「オマーン産の乳香」についての言及がなかったが、「乳香も中国で流通し、高価な香料・薬剤として珍重されてきたと思えますが、ソグド人の香料・香木の対象にはならなかったのでしょうか」という質問です。これはどの段階で乳香というものが流布し始めたのかということが関わるのではないかと思います。たしかに、これまで私が接してきた漢文やソグド語の資料の中には「乳香（あるいは薫陸香）」というタームは出てこなかったように思います。たまたまそれは資料から漏れているか、あるいは

はまだ乳香そのものが、8世紀以前にあっては、陸上経由のルートではあまり運ばれていなかった可能性もあるかと思います。私が扱っている時代では、陸上経由で運ばれた香料というのは、沈香や白檀、丁香といったようなものを主体としていたのではないかということです。

高久：ありがとうございます。

關尾先生は東から西へという人の流れ、そして荒川先生は西から東へという人の流れについて取り上げられました。時期的にも重なる部分がありますので、關尾先生から荒川先生の発表内容についてコメントをいただき、接点を見出していきたいと思いますが、いかがでしょうか。

關尾：ここに施設された研究拠点は東ユーラシアということで、それに関連して荒川先生のお話を考えてみました。ソグド人のコロニーがだいぶ東の長城地帯、あるいは中央アジアにたくさん設けられているとのこと。また榮新江先生作成のネットワークの地図も示していただきました。東ユーラシアというカテゴリーをもっと積極的に押し出していくのであれば、ソグド人のコロニーにしてもネットワークにしても、榮新江先生の地図は中国中心的なところもありまして、北アジアの遊牧世界や、いまお話に出ました渤海、要するに東北アジアのほうにもソグド人は進出していて、北アジアでは商人としてだけでなくさまざまな役割を演じたのだと思います。渤海とか東北アジアのほうでは、やはり東北アジアの特産品をソグド人が買い付けていた。それは渤海使に率いられてきた地域の首領たちが日本列島にももたらしたというような物品で、そういったところにも視野を広げていくと、まさに東ユーラシアというのをソグド人が股にかけてといいますか、より広範な網の目を張り巡らせてネットワークをつくり、もちろんコロニーのようなものをつくっていったのではないのかと、そういうことを思いながら荒川先生のお話を聞かせていただきましたが、このあたりについてはどうでしょうか。

荒川：いい点だと思います。ただ、いかんせん史料がありません。語るのは自由に語ることはできるのですが、なんせ史料がないところで制限があります。ただ、おそらくは東北アジアの特産品の重要性を考えれば、ソグド人たちがそこを無視するはずなく、そういった面ではたしかに有力商品といえますか、国際的な商品といえましょうか、テンの毛皮などの優良商品もありますので、彼らがそれを見過ごすはずはないとは思っています。

ただ、先ほども少し申し上げたように、彼らはそれをどういう形で交易したのかというのが、1つ大きな問題だと思います。特に一度獲得した商品をそのまま伝達するという形もありますし、私が思い描いているのは、やはり中・短距離の交易圏を数珠繋ぎにしているような中距離交易網のつながりみたいな形のほうが一般的にはメインなのかなと思います。長距離交易で直接遠くまで運ぶというのは、大きな国家レベルでの使節の場合は可能ですが、それをメインの交易活動として考えて良いかどうかは、よく分からない点が残されています。

關尾：1点だけ補足させていただきますと、ナナイ・バンダクの「古代書簡」というのは、まさに敦煌のあたりからサマルカンドに宛てています。あれは、リレー式で運ばれたのではありませ

ん。トゥルファンで出土した「称価銭文書」では、リレー式で東へ西へと商人が、それほど長距離ではない比較的短距離の輸送に携わっていて、そのたびごとに値が上がっていくということなのだと思いますが、ナナイ・バンダクの「古代書簡」ですとサマルカンドまでダイレクトにという感じになるのでしょうか。

荒川：麝香という商品の性格にも関わるのかなと思います。つまり麝香というのは、先ほども少し申し上げましたが、グラム単位で売られるもので、例えば4グラムでも馬が買えるようなレベルの商品ですから転売していくタイプのものではありません。かき集めて一気に本国へ送るといったタイプの商品になりますから、ソグド人の手紙に出てくる麝香の商品の取扱いはほかの商品とは違うというのがあります。

高久：ありがとうございました。荒川先生から關尾先生に対して何かコメントがありましたらお願いいたします。

荒川：実は、言い訳をするわけではないのですが、關尾さんの先ほどのお話を聞くまではクチャにああいったお墓が出ていたというのを、恥ずかしながら知りませんでした。あのお墓は磚室墓だということですが、關尾さんは、あれは五胡十六国時代の現象だというふうにとらえておられるわけですね。

關尾：この磚室墓というのは、南京近郊のお墓もこういう形で、ただそこは墓室が1つしかないのですが、ここは多いものは4つ並んでいるものがあったり、あるいは3つだったり、2つだったりするという違いはありますが、そういう磚室墓というのが3～5世紀の中国内地で広く見られるということです。

それから、この墓門上の門楼に実在していない動物の絵を描いたり、彫ったりするような形のものは、私が知っている限り、少なくとも敦煌でしかみられません。敦煌のお墓は絶対年代はよくわからないのですが、敦煌のものであればだいたい3世紀終わりから4世紀初めぐらいと考えられます。それはそれらの墓が塋域で囲まれ、その中には鎮墓瓶が出てきて年代がわかる墓があり、その世代を上にもずらしたり、下にもずらしたりしてだいたい3世紀終わりから4世紀初めぐらいに敦煌でこういったものが造られたと考えるわけです。とすればクチャのものもそこから何百年も遅れたものではないだろうと思います。まさに五胡十六国の時代は人が移動していく時代でもあったわけですから、そういうふうと考えていくことができるのではないかとというのが私の推測です。

荒川：それを前提にして質問させていただきますと、4、5世紀という可能性が一番高くなると思います。そうすると中央アジアのオアシス国家の話で考えれば、トカラ語を話していたクチャ人を中心としたクチャ国の形成があります。なぜそういった東から移動してきた集団をクチャ国が受け入れていくのかというのが1つ大きな問題になってゆくかと思います。つまり、単独集団

といいますか河西から流れてくるわけですが、高昌国まではそれまでの中国内地からの漢人移住の経緯からしてよくわかるのですが、クチャまでいってしまうとトカラ語を話す人々を中心としたオアシス国家です。しかも、少し後の時代になってくると、少しずつ史料が出てきて状況がわかってきますが、クチャ国としてかなり人の出入りを丹念に、こまめに知ろうとする意識が見え隠れする時代になってきます。

そういった面ではいいますと、クチャは唐の征服を受けるまでクチャ人による独立国家として存在していたのですが、そういったときに東からやってくる、それがどういった集団かはわかりませんが、それを受け入れてなおかつそこに住ませるといことはどういうことなのかなと思います。それについて、何かお考えがありましたらお願いいたします。

關尾：受け入れたどうかはわかりません。この墓群の出土地はいまのクチャの街の一番の繁華街の場所ですが、当時もそうだったのかというのはまた別の問題です。そうすると、クチャのオアシス都市国家の周辺に集落を自分たちで営んだということもあり得ると思いますので、そのあたりは何とも判断はできません。ただ、大事なことは、これは先ほどあえて申し上げませんでした。中国の人類学者たちの骨の鑑定によると、これは漢族の骨ではないだろうということです。そうすると、ますます話がわからなくなってしまいます。このお墓の造り方と画像磚は中国の喪葬文化以外に考えられない。そういった文化をクチャの人々が受け入れたのかということになると、ではどうやって、誰が伝えたのかということになりますので、やはり避難民が持って来たということだと思います。

ですから先ほども申し上げましたとおり、これはこれだけで終わってしまうといいますか、高昌、トゥルファンとは違って、漢族の人々は同化していったのか、あるいは絶滅してしまったのか、あるいは軍事的に攻撃にさらされてしまったのかなどいろいろなケースが考えられると思いますが、結局、人類学の骨の鑑定というのがどこまで信頼していいのかわからないのですが、やはり漢族の骨ではないという説も出ていますので、ますます混乱が深まるだけとなっています。

高久：ありがとうございました。

次に東への流れについてお話を聞きたいと思います。成 正鏞先生におうかがいしたいのですが、韓半島における西域の文物についてコメントをいただければと思います。

成：先ほどは百済地域と馬韓地域を中心にお話しましたが、それだけではなかなか全体像はみえてきません。重要なのは韓半島の地勢学的な位置です。大陸の中では韓半島が最も東端に位置していますが、その先に日本があるということがさらに重要です。

新石器時代、日本の縄文時代の頃ですが、それから青銅器時代には、どちらかというと北方系の文物がたくさん入ってきます。それが初期鉄器時代になりますと、中国さらには西域との関係が強くなってきます。

さきほど、上林里遺跡の桃氏剣について「中国から入ってきたか、あるいは個人が作った」という話をしましたが、それよりも重要なのはガラス玉です。近年、これが東南アジアやインドな

ど南の海岸ルートや海上ルートを通して韓半島に入ってきたという説がかなり有力になってきています。いわゆる環東アジアの交易網を形成していたのが、衛満朝鮮の時代であるということです。衛満朝鮮は、現在の平壤付近にあったと考えられますが、そこを中心とする交易網が重要であったと思います。

その次の大きな画期は楽浪郡の設置です。楽浪郡は、文献史料上はいわゆる植民地であり、広域を統制するという性格が強かったととらえられがちですが、実はそうではなく、むしろ交易を活発化させる要因にもなっていたのではないかと思います。これをうまく活用したのが百済や馬韓であったということです。したがって、百済は中国や日本を含む環東アジアとの関係が中心となります。

新羅や加耶は、むしろ百済のために海外交易が制限されていた部分がありますが、新羅の都である慶州の鶏林路 14 号墳で出土した、いわゆる宝剣があります。これは、先ほど荒川先生のご報告の中にあつたソグド地域から入ってきた文物であると考えられます。この宝剣はソグド地域から北方へ、さらに北方を通じて半島へと伝わってきたものではないかと考えられます。このように新羅の交易圏と百済の交易圏はかなり違っているということです。

百済と倭の関係は、いわゆる兄弟関係ととらえることができます。一方、新羅と倭との関係については、倭にも新羅系の文物がたくさん入ってきていますが、これらは生活に関するものです。ですから、百済と倭とは政治的な関係、新羅と倭とは一般的な交易関係であるかととらえられるのではないかと思います。もちろんそこには、加耶も含まれています。

これが大きく変わるのが 660 年、いわゆる百済の滅亡です。これによって東アジアの構図は大きく変わっていきます。これを示すものが正倉院にある「買新羅物解」ではないかといわれています。その中には、先ほど荒川先生がお話しされた香木なども含まれていると思います。もちろんその時は遣唐使のように日本から直接唐に行く場合もあつたと思いますが、新羅との関係も含めた複雑な国際関係が形成されていました。これまでは韓半島は大陸と陸続きであるので、陸路が重要視されてきました。また、日本の場合は海に囲まれているので、海運が重要視されてきましたが、これからは、韓半島の場合も海路を重要視しなければならないという認識に変わりつつあります。

これまで韓半島が経由地で日本列島が到着地であるという認識がありましたが、そのように考えるのは難しいと思います。先ほど日本に人質を送ることがあつたという話がでてきたかと思いますが、これは百済との難しい関係を象徴的に表していると思います。

研究というのは一方的な見方では問題があり、「生き残った者が勝ち」という諺もかなり問題があると考えております。単に生き残っただけでは意味がなく、どのように生きるのかが重要であり、特に共生するというのが重要です。片方が滅亡すると気分がよいというものではないでしょう。古代史からそのような教訓を得ています。これが、これから日本と韓国が共に歩んでいく道筋を表しているのではないかと思います。つまり、良くない関係を我々の世代で終わりにしようということです。ありがとうございました。

高久:ありがとうございます。まだまだ議論が尽きないことと思いますが、すでに時間がオーバー

しております。最後に、本センターの荒木敏夫先生から総括的なコメントをいただければと思います。

(フロア) 荒木：今日は会場に中国史の専門の先生方がおみえになっていまして、3先生のコメントに対してご意見をいただくということを考えておりましたが、残念ながら時間の関係でできませんでした。せっかく来ていただいて貴重なご意見を賜る機会を設けることができませんでしたこと、大変申し訳なく思います。

何よりも、壇上の3先生には貴重なご報告をいただきましてありがとうございます。また、今日参加してくださった200人を超える方の多くは、歴史を専門になさっている方ではないけれども歴史が好きだという方が圧倒的に多く、この炎天下にかかわらず多くの方が来てくださいました。このテーマは、見て「面白そうだな」というテーマではありません。それなのになぜこれほどたくさんの方に来ていただけたのかと、そういう意味では私は非常に感激しております。見識の高い皆様方がかくも多く集まってくださったということだと思います。

私たちは東アジア、東ユーラシアという観点で人の交流を中心に十年余り取り組んできましたが、出発は私たちが井真成の墓誌の発見に関わったところからで、日本史、アジア史というところから始まり、十数年こういう大きなテーマでやってまいりました。その中で、歴史を一国史の観点ではなく、アジアの観点から学ぶことがいかに重要なのかということです。しかし、重要なテーマを考えても、面白さがわからなければ来ていただけません。今回一般の方がこれだけ来てくださったというのは、私は会を続けてきたからだと思います。会場を見ても、かなり前からおいでくださっている方、シンポジウムがあれば必ず来ていただける方がたくさんおられます。聞いていく中で、聞くほうも耳が肥えてきます。こういうテーマで話をすれば、前回、前々回聞き損ねたような話も今回は出てくるのではないかという知的好奇心を、我々のほうも、一般の方たちに与える場を、幸いいい聞き手の中でこの十何年の中でつくることができました。その点でも、今日来てくださった会場の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

いろいろな事情で、文部科学省の政策が変わればまた変わる可能性もありますが、シンポジウムは、実はあと1回しかできません。研究でこういうテーマでやっていく、アジアに目を向けて、一国史ではないアジアの関連の中でアジアと共に生きていく歴史的事実を学びながら育っていくという、そういう機会がなくなってしまうことになります。1つのテーマをやるというのはなかなか大変です。お金もかかります。その中で文部科学省の支援、大学の支援を得ていままでやってこれたわけです。国の文化行政が貧困な中で、こうしたプロジェクトが、本学で続けられるような手立てを考えていただければ・・・と思います。また、私は退職しておりますので、現職の専修大学の先生方に、一般の市民の方にも聞いていただき、共に考える場をつくっていただけるように、頑張ってもらえればと思います。よろしく願いいたします。

高久：ありがとうございます。

長時間にわたり、ご参加いただきましてありがとうございます。本日のシンポジウムの内容は例年通り、年度末に発行する予定の『年報』に掲載いたしますので、ご覧いただければと思い

ます。

本センターのシンポジウムも次回が最終回となります。次回は11月17日の土曜日を予定しております。ホームページ等でご案内する予定ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

本日はありがとうございました。

【了】